

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

世界で自分にしか 描けない絵を描く

ワープロで描いた絵を国内外で出展
「芸術を通じて交流を深めたい」

●社会学部1年次生 浦 大典さん



関西大学のキャンパスにはアーティストもいます。昨年10月に中国・北京で開かれた「中日現代芸術展」に、社会学部の浦大典さんは3点の作品を出展しました。中学時代から絵の才能を開花させ、高校2年生の時に個展を開催。翌2005年には国際的な美術展「ベネチア・ビエンナーレ」に出品。明るく鮮やかな色彩とともに乱舞する鳥や蛇などを描き、独創的な絵で活躍舞台を広げてきた浦さんですが、2007年はさらに飛躍の年になりそうです。

浦 大典—うら ひろのり

■1987年兵庫県生まれ。クラーク記念国際高等学校卒業。社会学部1年次生。2004年、AUベネチア・ビエンナーレ選抜展最優秀賞(兵庫県知事賞)受賞。



一度見たら忘れられない強烈な印象を残す絵のツールは、なんとワープロ！浦さんは幼稚園のころ、母親が仕事で使っていたワープロに付いているペンで画面に絵を描いて遊んでいました。ワープロの描画機能を使った落書きが、浦さんの絵の原点であり、今も変わらない制作スタイルです。「ワープロが相棒」となって絵を描いている時が一番楽しいと言い、イメージがわくと一日か二日で一気に書き上げてしまいます。

小学生時代、夢中になったのが年賀状作り。親戚に出した九頭竜の年賀状がきっかけで、中学2年の時に創作活動や生き方を決定づけるような人との出会いがありました。現代芸術の大家の嶋本昭三・宝塚造形芸術大学教授から「世界であなたにしか描けない絵を描きなさい」と言われたのです。このアドバイスに励ましと衝撃を受け、宝塚造形芸術大学に最年少の聴講生

として通うことになりました。

「絵の表現などは初めからそんなに変わっていないかもしれませんが、気持ちの持ち方が大きく変わりました。先生は芸術を楽しみなさいということもおっしゃっていて、僕自身の個性を伸ばせるような、精神的なことを教わりました」

2004年の4月に初の個展を西宮市のギャラリーで開催。中学2年の時に制作した「不死鳥のレストラン」には、黄色い不死鳥が月に住む緑色の蛇に食べ物を運ぶ姿が、肉を焼く炎や夜空に輝く星と一緒に描かれ、幻想的な空間が広がっています。

その年の7月には兵庫県立美術館で行われた選抜展で最優秀の県知事賞に輝き、翌年イタリアで開かれる美術展「ベネチア・ビエンナーレ」に出品される招待賞も受賞しました。

中学時代から高校時代にかけて才能を開花させながらも、いろいろと悩んだこともあり。現在も交流のある多くの友人や絵画仲間にも励まされ、通信制高校から大学進学を目指しました。「肉体的にも精神的にも強くなろう」と、少林寺拳法も続けてきました。

「社会へ出て行くには、まだ成熟しきっていない部分があります。活気があり、雰囲気が明るい、この大きな大学で、社会、福祉などの勉強をして自分なりに進む道を見つけないと」と関西大学へ。

昨年10月の「中日現代芸術展」は、中国政府と嶋本教授が会長を務める現代芸術国際AUなどの共催で、両国の作家約100

人が参加。浦さんは「爆雷真っ最中バドミントン」など3点を出展しました。

さらに、今年の7月には北京で「第1期大型中日障害者芸術展」が開催予定。「作品を出すだけでなく、スタッフとしても役に立ちたいし、中国の障害者の方々と交流も深めたい」。国内でも、絵を通じて障害を持つ人々と触れ合う機会が増えています。

8月には仙台市で開かれる「日韓展」に出品するほか、同市の中本誠司美術館で招待個展の開催も決まっています。

「ぜひ機会があれば関大でも芸術展を開きたいですね。先生方や学生、地域のみなさんにも、僕の絵や障害を持った方々の絵など国内外の斬新で面白い作品を見てもらって、新しい発見してもらえたらいいと思います」

人生をアメリカン フットボールに懸けて

引退試合を関大OB・現役の親子で対戦
「家族や周りの支えがあってこそ」

●アズワン・ブラックイーグルス 監督
義政 孝夫さん

義政孝夫さんは、関西大学第一高等学校2年の時にアメリカンフットボールに出会い、その魅力に取りつかれました。それからアメフト一筋の人生を送ってきました。関西大学時代はライスボウル(当時は東西学生オールスター戦)に出場、卒業後は名門クラブチームのブラックイーグルスに加入し、日本リーグ3連覇に貢献。「関西最強ラインマン」としての活躍は目覚ましく、84年からは監督としても手腕を発揮し、戦う集団をまとめて上げてきました。

「試合に勝った、負けたで泣ける。これはお金では買えないものがあります。1年のほとんどが土曜日、日曜日でも休みなしです。専用グラウンドがないため、あちこちのグラウンドを借りて練習しています。資金力の豊富な強いチームに、何とかして勝ちたい。浪花節の世界に近いかもしれませんが、実際に去年は松下電工に勝ったのです。やったらできるんや、ということをや若い子にも体験させてやりたい。そういう夢や誇りを持ってやってきました」

この思いが義政さんの長いフットボール人生を支えてきました。関大一高の2年で始めて以来、柔道で鍛えた強い体と持ち前の俊敏な動きで、水を得た魚のような活躍ぶりを見せ、関大時代は「関西に義政あり」と言われるほどに。「昔のアメフトはまさに格闘技。練習でも、ガッツンガッツン当たっていく。試合では、やるかやられるか。われわれラインマンは対一の勝負なんです。相手の目を見て駆け引きをし、どちらに動くか瞬時に判断しなければなりません。この体ですけれど、瞬発力には自信がありました」

身長178センチ、体重135キロの巨体をフルに生かしたプレーは、社会人アメリカンフットボールの最高峰であるXリーグの最年長選手となるまで衰えませんでした。

父親から受け継いだ家業の製缶工場は、アメフトの防具や備品の倉庫でもあり、スタッフのミーティングの場所でもあります。「家族の支えがなかったら終わっていたと思います。妻にはいくら感謝してもしきれません」。ブラックイーグルスの若い選手たちも、勤めを持ちながら週2、3回、ウエートを中心にトレーニング、「土日は朝から晩までアメフト」です。義政さん同



義政孝夫—よしまさ たかお
■1955年、大阪府生まれ。関西大学第一高等学校でアメリカンフットボール部に入部。77年、関西大学商学部卒業後、ブラックイーグルスに入り、2005年まで現役として活躍。84年から監督を務めている。

様、「周りの支えがなかったら絶対できない」ところで頑張っています。

そんな父親の姿を見て育ったからか、義政さんの3人の息子さんたちもアメフトの道へ。しかも、長男の知也さんは関西大学からブラックイーグルスへと、同じ道をたどることになりました。2005年6月、関西大学千里山中央グラウンドで、義政さんの現役引退試合が行われました。アズワン・ブラックイーグルス対関西大学カイザーズ、すなわち関大4年の知也選手との親子対決が実現したのです。(写真上)

「最後に親子で試合ができたことは、本当に幸せでした」という義政さんから、関大の後輩たちにメッセージを――。

「失敗を恐れたら、絶対だめです。試合では、意外な展開が必ずあります。私は強いチームと対戦して、いろいろな経験をしてきました。強いチームは、こうすれば勝てるというのを全員が分かっている。その時の目の色は、全然違います。もう、怖いんです。恐怖心に襲われます。こちらもその上に行くには練習しかないんです。つらい練習でも、辛抱してやれば絶対いい結果が出ると信じて、頑張ってくださいね」

闘志はいまだ衰えず。社会人日本一を目指して、そのためのファイナル6出場が悲願です。